

来ぶらり70

しかし、...どうしても決着をつけておきたいことが私にはある。それは近年の流行とさえ言える“図書館消滅論”に対してである。この説は、現状では2つに大別されるようである。1つ目は、図書館絶滅論(=図書館不要論)、2つ目は、博物館的図書館説(一種の姿と形を変えた図書館延命説)の類。何やら、恐竜のようである。

いずれにしても、私は自分の図書館存亡観を比較的分かりやすく語る自信がない。なぜなら、私の場合はパスカルで始まりマラルメで終わる手筈になっているからである。

パスカルの言葉が、その後の大学の性格を決定した。彼は、「パンセ」の冒頭で述べている。“幾何学的な”と“繊細な精神”のことを。いわゆる、“理科系”と“文科系”の誕生である。

20世紀半ば、コンピュータの発明により、この概念はさらにリファインされていく。“理系”は“デジタル”に、“文系”は“アナログ”に。特に、この“デジアナ”は、今度は大学図書館の性格さえも決定してしまった。これが、事の発端である。

なお、ここでは、デジタルとは“電子化された資料”のことを。アナログとは従来の“本(=図書)”のことを指している。

さて消滅論の論拠とは何か。要するに、デジタル優位説である。電子資料をあさるのに従来の「場」=「図書館」など不要であると言う理論。事実、ネット世代には“図書館は透けて見える”ものでしかない。利用者は、図書館を中継することもなく目的の情報にアクセスすることができるからである。もちろん、

「図書館は電子書籍の夢を見るか？」

パスカルからマラルメへ

この背景には巨大なコンピュータネットワークの恩恵が存在することは言うまでもない。

さらに、近年の電子図書館の実用化が、図書館博物館論に拍車をかけることになった。

しかし、消滅論は完全に何かを見落としていないか？ それはヒューマンネットワーク(精神層)である。コンピュータネットワーク(物理層)の発展も、この存在なしに考えられないはずなのに…。しかも、ヒューマンネットワークは、人と人を結びつける場や空間の存在をも予測させる。大学とキャンパス。図書館と閲覧室。

それから、私にはあのあまりにも有名なマラルメの言葉が記憶から消え去ることがない。

「結局のところ、世界は一冊の美しい書物へと至るためにつくられているのです」

世界をトショカンに置き換えても同じであろう。しかし、書物を将来の覇者「電子図書館」(紙のように薄くなり読書が根本から変わる可能性大)に言い換えれば不幸な深読みとしか言えなくなる。

つまり、彼はアナログの不滅性を示唆しているのではないだろうか。この世界観の行き着く先には、1個の建築物が見えてくる…。

最後に、“千と千尋の神隠し”のDVDの宣伝文句にこのようなものがあったと記憶している。「これは、買っても封を切らないで20年後に見てほしい」と。うまいものだ。願わくは、私のこの拙文もすぐには読まないで10年後に読んでほしいものだが...確かに、少し遅すぎたようだ。

(運用課長 鈴木宗一)

新サービスGLIM電子図書館!

Contents

伊能図「大日本沿海輿地全図」 だいにほんえんかいよちぜんず

この八月の夏、新聞紙上で、作者不明とされてきた地図が、調査の結果、江戸時代の測量家、伊能忠敬による「大日本沿海輿地全図」の小図3枚だったと新たに判明した、との報道がされました。東京国立博物館では、この発見された同図を修復し、来年秋に一般公開する予定で、研究者諸家の話題を呼んでいます。

本学大学図書館においても、この春から新しいサービスとして導入したGLIM電子図書館を通して、江戸時代後期の写本として伝わる、本学図書館所蔵「伊能図 中図」を、貴重書閲覧につきものの、煩わしい手続き抜きで、ホームページ上でマウスを使い、容易に見ることができるようになりました。

学習院の伊能図 中図 は、九州の部を欠いていますが、一、蝦夷地（東南部）から 八、阿波・讃岐・土佐・伊予までの8舗に分かれています。各地図を合計した大きさは、現在の面積に換算すると、約15.8m²です。おおよそ畳9枚分になります。どのくらいの大きさが想像できるでしょうか？電子図書館の中では、この膨大な資料がデジタル化されて、ウィンドウ上の小さな画面で見ることができ、ブラウザを2つ開けば、同時に左右において、比較も見るができます。実物の地図を左右において、比べようとすると、一枚が畳一畳ほどもある資料を傷つけないように、細心の注意を払って見ることとな

りますが、電子図書館では、そんな気遣いもなく、モニター上で好きな時に利用できます。

図書館長は、電子図書館公開後、早速、伊能図上で中学生時代の疎開先、尾張国、津島近辺へアクセスしてみて、その鮮明、精細な出来栄えに感銘して、同地を懐かしく思い出されたそうです。

伊能図 中図 だけでなく、この他、伊勢物語、枕草子、稲富流砲術伝授書の貴重書が公開されていて、王朝心理学文学小史は、現在、公開準備中です。また、今後、コンテンツを増やされる予定です。

インターネット経由ならば、許可もいらず、閉館時間や休館日を気にすることなく、モニター上で好きな時に利用できます。新サービスを開始した大学図書館のホームページへ、ぜひ、アクセスしてみてください。

(運用課 川中はるか)

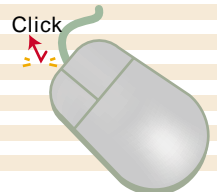


三浦半島

アクセス方法

1. 大学図書館ホームページ画面上の「GLIM ELS総合情報検索システム」をクリックして開きます。
2. メニューの中より「電子図書館システムGLIM ELS 一次情報資料検索および閲覧」をクリックして開きます。
3. 「大日本沿海輿地全図」をクリックして開き、(一行目、「電子図書館一次情報検索(すべてのコンテンツ検索)」を選び、検索することも可能です。)青い線で描かれた日本地図上でマウスを移動させると地域ごとに漢数字が表示されます。(北海道は「一」)
4. 地域を選びクリックします。地図が表示されます。
5. 見たい部分でクリックするとズームされて、詳しく見るができます。

(注：ズームさせるには、プラグインソフトウェアをインストールする必要があります)



やっぱり 寝そべて 本を読みたい!?



デジタル出版等が盛んになっていくと、一方で「アナログ派」の反発が大きくなっていくのだろうか。レコードからCDへ移行した時のように・・・確かにパソコン画面ではパラパラと眺めながら拾い読みができない

し、紙面全体をざっと眺めて、好きなように読むことが難しい。画面スクロールの技術や画面表示の技術が今以上に向上してくれば、解決していくと思うが、人がページを捲るように自然に・・・とはなっていない。あるいは「電車の中で読んだり、寝転がって読むこ

とができない」という反発もあるかもしれない。しかし、これについてはハンディな文庫本サイズの情報端末（デジタルブック等）が登場し始めているので決して叶えられない注文ではない？のかもかもしれない・・・。寝る前に読みたい小説の一章分を、薄手で軽量なバックライト付の液晶端末にダウンロードして寝床に入って楽しむ・・・。なんてことはできない注文ではないのだ。さらに「美しい装丁や紙ざわり、活字の配置など・・・、本として所有している楽しさ、喜びがない」という反発もあるかもしれない。彼（女）には、装丁やレイアウトの美しさが大事だけではない。本というモノが好きだといっているのだから、こればかりは叶えることはできない。図書館利用者（本学に限らず）はいろいろな要求を出すものであり、それで良いのだと思う。その要求を何とかしたい！と思うのが図書館司書の最大の喜びであり、意地だったりもする。そのように考えていくと「電子図書館システム」のシステムが確立して普及し始めると、図書館利用者はこう言い出すと思われる。「自分だけの図書館を持ちたい」と。

これは当然の要求である。自分が読んだり、知りたい情報をその都度、毎回アクセスしなくても何かの折りにせっせとダウンロードしておいて、後でゆっくり楽しんだ方が効率がいい。問題はこうして溜め込んだ情報の整理である。図書館並みとはいえないとしても、様々なデータがパソコンのハードディスク等に蓄積されている。これでは「後でゆっくり読む」なんてこともできなければ、情報の再利用や検索することもできない。

こうした体験をすると、「自分だけの図書館」が欲しくなるのだ。欲しいのは、その「整理や検索のノウハウ」である。ということは「電子図書館」は求められた情報を提供するだけでなく、その整理や検索のノウハウも提供することになるのかもしれない。いずれ図書館として挑戦していくテーマにもなる筈である。



（総務課 伊藤 修）

mini 情報



「館内ぶらり」

大学図書館に入ってすぐ右手に、ちょっとお得なコーナーがあるのをご存知ですか？

学内の配布資料や学内外の各種イベントのお知らせ、あるいは美術館・博物館のチラシや招待券・割引券などをご自由にお持ちいただけます。枚数に限りがありますので、興味のある方はこまめにチェックしてみは？

（運用課 篠原三佳）

ご存知ですか。大学図書館を中心にしておおよそ東の方面に中等科・高等科図書室があることを。そう、硬式野球場に面した校舎の1階にこぢんまりした図書室があります。中・高あわせて99座席・蔵書冊数は約7万冊。目白の杜の片隅にひっそりとたたずんでいるのは建物だけで実は中身はすごいのです。

昼休みや放課後のひと時など、知的好奇心旺盛で生命力に満ち溢れた生徒達が、入れ替わり立ち代わり、まるで津波の如く押し寄せてくるのです。時には図書室であることを忘れるほどの賑わいです。

迎える図書室側もへこんではいません。立候補や

推薦により選ばれた優秀な図書委員達とかつては若くてやさしかった司書が手ぐすねひいて待ち構え、百戦錬磨の図書主任が仕切りつつ、彼らの多様な要求に誠心誠意こたえています。

むろん満員御礼・入れ替え制という日ばかりではありません。嵐の前の静けさも、竜巻の去った静寂もありますので、ぜひ「中・高等科図書室」にお立ち寄りください。昔読んだ懐かしい本に出会えるかもしれません。

大学生の皆さんにも本の貸出をしています。

(高等科図書室 中村清子)

2年前より図書館の仕事に携わっていますが、以前と違い現在の図書館のあり方は幅が広く、奥行きも深く相違進歩しています。

私が高校生の時代に宿題等で利用したことのある図書館について、少々記憶をたどり回顧してみましょう。

今から半世紀前の昭和27~28年頃に利用した国立国会図書館（現在は赤坂の迎賓館）の例をみましょう。

まず、入口で消毒液を使って手を洗います。そして受付に行きカードに学校名、学年、氏名を記入します。さらにノート、筆記具以外の持ち物はすべて預けます。

図書は開架式ではなく、まず索引箱より図書を探し請求カードに記入し、係員に渡すと持参してくれます。

この時代は、貸出は一切認められずすべて閲覧のみでした。

閲覧室は本を読むか、ノートに転記するか以外に方法がなく、静かで雑音等は全くなく、本をめくる音、筆記する鉛筆の音、まるで風のない森林の夜を思わ

「図書館の今昔昔」

夜の図書館 ひとりごと... シリーズ

派遣職員 高橋 賛治



せる雰囲気でした。当時は公立の図書館はほとんどなく、紙（本）に飢えていた時代ではなかったでしょうか？

また、某大学時代も昭和30年前半であり、学内には図書室（館？）はありましたが、蔵書はそれほど多くなかったと記憶しています。貸出を受けた経験はなく、やはり閲覧が主であったようです。

このような時代を過ごした私にとっては、現在の大学図書館、公立図書館ともに立派な設備、施設等をもっており、さらには大学間相互利用、公立図書館においては近接区市町の人も利用可能であり、何不自由なく利用できる時代です。また、コンピュータ、等の電子機器が揃っており、一種の紙（知識）の城とも言えるでしょう。

このような図書館を利用する現在の学生のみなさんは見識、知識ともに豊富になり、博学を持った人間として巣立って行くことでしょう。

私は昔を思い出して、静かで、上品で、楽しい図書館でありたいと思っています。

図書館では夜のカウンター業務を派遣職員の方に応援していただいています。

「来ぶらり」のバックナンバーは大学図書館ホームページ (<http://www.glim.gakushuin.ac.jp/>) で公開しています。

来ぶらり No.70 2002年10月1日発行

発行責任者：黒田成俊 編集委員：伊藤 修・川中はるか

学習院大学図書館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

☎03-3986-0221(代) 内239㉔(参考) 内239㉗(閲覧) 03-5992-100㉔(閲覧直通)